
愛情の形

ちーきー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛情の形

【Zコード】

Z4549F

【作者名】

ちーきー

【あらすじ】

現代より少しだけ科学技術の発達した近未来。少しずつ戦争に投入されていった人との対話が出来るロボットと、軍人として生き、戦う人間の女性との絆と愛情の行方は

現代よりも科学技術の発達した未来、太陽光発電のエネルギー効率上昇により、石油エネルギーからの移行が始まった世界。

クリーンなエネルギーへの移行により環境汚染は激減、人類の生活も地球環境も豊かなものへと変わつて行つた。

しかしどれだけ科学技術が発達しようと、世界からは戦争が飽きる事無く続いていた。その理由は外交や貿易摩擦から生じたものや、資源の独占、果ては国のトップが起こした暴走によるものなどと、様々なものがあつた。

そんな世界の中、広大な国土と強大な軍を持つA国は多種多様な理由で戦争を繰り返しては勝利を収めて自国をより大きく強い国へと成長させていった。あまりにも多くの紛争に介入している為に、戦争の影には必ずA国の姿がある、と言われる程だつた。

これはそんなA国が繰り返す数多の戦争の内の一つで起こつた話だ。

その戦争で、A国が接收したギャドと言う小さな町に設けられた元々の病院を使つた戦場病院に、一人の女性が怪我の治療で入院していた。既に前線は延び、その町へ敵軍の侵攻は無いとされ大量の物資や人員が送り込まれた拠点となつている。

その女性の名前はオニール・カリーニ。階級は少尉であった。彼女は先日行われた戦闘で、戦闘不能なほどの負傷を負い一番近い場所にあつたこの町へと運び込まれたのだった。

ベッドの上に眠る彼女の姿にある者は惜しむような表情をし、あら者は悲しむような表情を見せた。

戦線から離れているお陰で髪の手入れが出来たのだろう、ブロンドのショートヘアは艶やかでつい最近まで戦闘をしていたようには思えない美しさだった。釣り目がちな目は冷静さを感じさせ、鍛え抜かれた体は胸は小さいものの、腹や腰は見事な曲線を描いて

いて整つた顔立ちと合わせて誰もが振り返る美人であつた。

しかしそんな容姿を持つ彼女だが、普段は鬼と称されるほど厳しく、彼女が担当する新兵の訓練に参加した者の半数は辞めていつてしまつ程であつた。そんな彼女が人前で喜びの笑顔を見せる様な事は無く、いつでも冷たい印象を抱かせる表情を見せていた。戦場では士官学校を主席で卒業した優秀さを存分に披露する活躍を見せ、二十六と言う若さで優秀な戦果を上げていた。

先の戦い、彼女が負傷を負う事となつた戦闘でも彼女は自分の部隊の指揮官が倒れた代わりに部隊の指揮を執り、見事な勝利を飾つたのだ。

だがそんな彼女は、やはり軍人ではあるが女性だからだろう、用意された病室は個室であり、そしてそのベッドの上で楽しそうに、それこそ恋人と談笑するかのように傍に一緒に居る男と笑いあつて話をしていた。彼女を知る人物が見れば驚きを隠せない光景だつただろう。それほどにオーナーには笑顔と言うか、楽しそうな感情が似合わない女性だつたのだ。

一ヶ月前。

人の命を駒として扱われ、次々と捨てられては補充され、また捨てられていく戦場。戦闘が終了し、A国の陸戦部隊が占領したギヤドの町には家の焼ける匂い、硝煙の匂い、血煙の匂い 戦場の匂いが充満していた。

息絶えた人間だった物は一箇所に集められ、正に死の溜まり場と言つかのような死体の山となつてている。戦闘が終了したのを待つていたかのように続々と現れる補給物資を満載した輸送車が乗り入れられ、何日も風呂に入つていらない着の身着のままの兵士達へ物資が次々と渡されていった。

その物資は食料であつたり武器弾薬であつたりと様々ではあるが、物資を手渡された兵達の表情は次の戦いを思つてか一様に固かつた。そんな中、損傷の少ない一軒家の中に補給部隊の指揮官、ジョナ

サン・クリスターとその部下が一人、そしてもう一人、彼らとは毛色の変わった男が後に続いて入ってきた。中に入ると、周辺の地図をテーブルの上に広げて難しい顔をしている女 オニール・カリー少尉ともう一人、まるで熊のような黒髪を角刈りにした巨体の男がテーブルを挟んで立っていた。この町での戦いで彼女達を率いる大隊長が死亡し、今はオニールが陸戦部隊の指揮を代理で執っていた。

「……補給部隊か。時間通りだな、ご苦労」

家中に入ってきたジョナサン達が敬礼をするよりも前に、自分よりも階級の低い彼らにちらりと視線を送つて投げやりな言葉を吐き出すように言うオニール。ブロンドのショートヘアを搔き分けながら忙しなく地図に向いている視線を動かしていく、彼らに構つている暇はなさそうだった。しかし補給部隊の彼らにも任務があり、オニールが忙しいからと言つてその場で待ち続ける訳にも行かなかつた。

「少尉、頼まれていたバトロイドの代わりをお持ちしました」

敬礼をしながらはきはきとした声でジョナサンが言うと、オニールも興味が沸いたように顔を上げた。バトロイドとはA国で開発された戦闘用人型アンドロイドの総称であり、最近戦線に投入されるようになつたロボット兵士の総称だった。

ジョナサンに促され、背後で待機していた男が前に歩み出る。瞳は青く、髪は首筋まで伸ばした茶髪。体格は成人男性の平均をベースに作られ身長の高いオニールの目線とほぼ同じ位置にバトロイドの視線が来る。表情は清々しい青年のような顔つきをしていて、まさに好青年と言つた様子だった。

「君か？」

「はい。XSP-05Aジョーケイリーであります」

オニールに向けて自身の形式ナンバーを伝えつつ敬礼する。その体勢のまま微動だにせず、瞳は真っ直ぐにオニールに向けられていた。その彼の額をカリーオニールはおもむろに指でつついてみる。

人のような姿、人のような声、人のような挙動。しかしその肌質はゴムを触るかのような感触で、声は人間に近いもののやはり機械音声の特徴が残り、同じ姿勢のまま微かにも動かない体と、細かな部分が彼を口ボットであると言つ事を物語つていた。

「Xと言えば試作ナンバーじゃないか。それも最初期に作られたものだろう？」私が頼んだのはこの間の戦闘で大破した最新型と同じ

もののはずだぞ？」

「そうしたいのはやまやまのですが、なにせ最新型は生産数が少ないもので。まだお偉方は彼らの功績を認めちやいないのでよ。それに彼は優秀ですし、十一体の量産型の方はきちんと用意できました」

要望を伝えたのもその手配をしたのも彼がした事ではないのだが、キツ、と睨みつけてくるオニールの気迫に圧されてつい言い訳じみた事を口にしてしまうジョナサン。だが彼が言つている事はあながち間違いではないのだが

「私は最新型を寄越せと言つたんだ。それが無理なら一世代前の物を。その要望に応えるのが君達の仕事だ。それに応えられないのなら職務怠慢と取られても仕方ないぞ？」それとも、そのポンコツと一緒に前線で戦つてみるか？　すぐにケツに鉛弾ぶち込まれて逃げ出したくなるだろうよ。それともそつちの趣味でもあるのか？」

その場に居る全員が口を閉ざしてしまふほどの気迫でまくし立てるオニール。その言葉の裏には、今まで使つていた最新型のバトロイドに対する信頼を感じられるのだがそれが手に入らないハつ当たりをされるジョナサンにはいい迷惑であつた。

視線を外す事無くジョナサンを睨みつけるオニール。何か言い訳はないか、ジョナサンがそんな事を考えていると、

「少尉、私はポンコツではありませんよ。少なくとも私の尻は装甲入りなので弾丸は貫通しません。それにジョナサンは尻軽です。また他の女性の所まで行かなければならぬので私との戦場デートはまだ先となりそうです。冴えない外見に似合わず人気者なのですよ、

ジョナサンは、

初めに沈黙を破ったのはバトロイドだった。その言葉に思わずジョナサンが吹き出してしまつ。

上官の手前すぐに姿勢と表情を正したジョナサンだったが、オールは別段ジョナサンを気にする風でもなく、バトロイドに視線を移動させた。

「なるほど、インターフェイス機能は万全なようだ。前の使用者とはよく会話をしていたようだな、ええ？」

冷笑を浮かべながらバトロイドに向けて挑発的な言葉を吐き出す。彼らは戦闘能力とは別に、使用者の精神的苦痛を和らげる為の、会話能力と最低限の表情の変化をもつたインターフェイス機能が実装されている。これは元々介護用のアンドロイドとして開発された物を戦闘用に転用した名残だった。最新型のバトロイドにはその機能は排除され、より戦闘的な物へとなつてはいるが、最初期型の彼にはその名残が色濃く残っていた。

「まあこのポンコツしかないのなら仕方ない。だが最新型が手に入つたら最優先で私の所へ寄越すように。いいな？」

オールの言葉でこの件が一応の解決へと至つたと悟り、了解ですと告げて書類にサインを貰つた後にその場を後にしたジョナサン。後に残つたのはオールの物となるバトロイドだけだつた。

「……これは厄介払いでもされましたかな」

一人取り残されたままその場で立つバトロイドを見ながら、オールと一緒に居た男、オール率いる陸戦部隊の副官であるボーン・ロイヤル曹長が口を開く。

「言つたな曹長、次までの繋ぎと思つておけ。……おいお前、もつこは良いから外へ出ていなさい」

「ここへ来るまでトラックの上で存分に太陽光を浴びておりました。充電の必要は今はありますん」

「……見張りをしていろと言つたんだ」

「なるほど。では、見張りをします」

そう言つて外へ出て行くバトロイド。その後姿をボーンと一人で眺める。彼らの体内にはバッテリーと、それに充電する為のソーラーパネルが装備されていて、戦闘中であつても日中ならば充電しながら戦えるのだ。

「中々愉快なロボットでありますな。前の持ち主は相当彼を気に入つて話をしていたんでしょうね」

「話しそぎだ。あれでは本来の領分から外れてしまつ。最新型はともかく量産型はまだまだ死に難い歩兵程度にしか使えんとは言え、世話好きの小母になられても困るんだよ」

にこりともせずに再び地図の上へと視線を戻すオーナー。その姿を苦笑を浮かべながらボーンが眺め、それに気付いたオーナーから悪態をつかれながら次の行動についての会議を行うのだった。

その日の晩、オーナーは自分用に用意した部屋にいた。

無事だつたベッドがあり、久しぶりの柔らかな寝床に満足そうにしながら腰を掛け、支給された酒の入つたグラスを片手にくつろいでいた。

目の前には昼間に連れてこられたバトロイドが居た。外では量産型のバトロイドが警備をしている。彼だけを招き入れたのは自分専用のバトロイドとしてその個性を知る為だった。

相手を知り、自分を教えることで連携を取りやすくなる。本来なら人工知能をリセットした後に、使用者に合わせて再教育を行うのだが、すぐに前線へと赴かねばならない状況故にそのままの状態で使う事となり、早急な相性合わせをする必要があつたのだ。

「君の前の持ち主、名前はなんと言つんだ？」

酒を喉に流し込みながらバトロイドに問い合わせるオーナー。すぐ

に酒を飲み干してしまったのだが、緊急の出撃がある可能性もあり、その一杯だけで我慢をする。

「ブルック・ランフィールド大尉であります」

「昼間と同じようにはきはきと答えるバトロイド。

「ランフィールド？ なるほど、だからそんなにおしゃべりなのか」その名に驚きと納得の表情を浮かべながら空になつたグラスをサイドテーブルに置いた。それと同時に手の平に収まるサイズの機械を手に取る。それはバトロイドに自分の位置を知らせる為の発信機だつた。バトロイドは有事の際にはその発信機の信号を追つて使用者を守る為に行動するのだ。

「ご存知なのですか？」

発信機の具合を確かめているオニールにバトロイドが問う。

「以前に一度会つた。あろう事か妻子持ちの癖に私に口説いてきたよ。おしゃべりな男だつたが嫌いではなかつたな」

好きでもなかつたが、と後に続けながらその時の様子を思い返すオニール。使用者が居ないバトロイドと言うのは、つまり使用者が死んでしまつたと言う事でもある。それを口にはしなかつたが一瞬目を瞑つてその死に冥福の祈りを捧げた。

「で、君はカタログ上のスペックでは正直に言つてその分厚い皮下脂肪を盾代わりにするしか役に立ちそつにないのだが……他に出来る事はあるのか？」

「はい、ありません」

きつぱりと言い放つバトロイドに思わず肩透かしを食らうオニール。一瞬、バトロイドがにやりと笑つたかのような表情を見せた後、「強いて言えば敵を見つけ、弾をぶち込む程度です。それと私はある程度の改造が施されているので、カタログよりは性能が上がっています。それに、装甲の事を皮下脂肪と言われるのは少々傷つきます。ロボットなのでデリケートなんです」

「はは、そうか。それは良かった。期待はしないぞ」と、嬉しそうに言い放つた。

「はは、そうか。それは良かった。期待はしないぞ」

唇を吊り上げて笑うオーナー。その様子をバトロイドは嬉しそうに眺めていた。

「なんだ？ 君は私が笑うのがそんなに嬉しいか？」

「ケニーです」

「ん？」

「私の名前はケニーと言います。大尉が名付けてくださいました。……少尉はあまり笑わない方だと思いましたので、笑顔が見れて少し嬉しかつただけです」

「そうか？」と小首を傾げるオーナー。

「私の小隊には私も含めて冗談を言うような奴が居ないからな、笑う事がないんだよ。お前のような奴が私の隊に来るのは珍しい。ま、君は私の持ち物となる、別段私に気を遣わなくもいいが、なるべく動きは合わせられるようにはしてくれよ」

「ならダンスでも踊りましょうか。腹踊りくらいなら大尉から教えてもらいました」

ケニーの応えに、思わず開いた口が塞がらなくなり、

「……君、本当に機械で動いているのか？ 中に人が入っているんじゃないだろうな」

ついそんな事を考えてしまうのだった。しかし当の本人も、そうだったらどんなに良い事でしょうが、と笑うだけだった。

ギヤードの町よりも大きな、平時であれば周辺の流通の拠点となり、多くの国の人間が行き交う商業都市フランディー。街の象徴である巨大な時計塔が戦場の只中だと言つのに自分を強調するよつに高く聳え立つていた。

普段街を行き交つている商品の代わりに今は弾丸が行き交い、子供達が走り回る路地には武器を持った兵士達が走り回つていた。その街の先にはA国が打倒しようとする国の首都があり、そこへ攻め入る為の足がかりにこの街を占領するべく、オーナー達の部隊は増

援として駆けつけたのだった。

そんな中を輸送車が三両編成で走る。そこにはオーナーを初めとする陸戦部隊の一部が乗っていて、激戦と化しているその戦場の前線へと移動しているのだった。流れ弾か狙った弾か、数発の弾丸が輸送車の装甲を貫こうとするがあっけなく弾き返される。

「装甲輸送車があつてよかったですな」

「まったくだ。移動中に蜂の巣なんて死に方は情けなくて涙が出てくる」

オーナーとボーンの掛け合いに、同じ車に乗っていた兵士達の雰囲気がざわつく。

「心して掛けられよ、ここは鍋の底だ。油断すればあつと言つ間にケツに火が着くぞ」

しかし釘を刺すようなオーナーの言葉で場は静まり、外で起る事を想像して皆が一様に口を閉ざす。

無言が耳に痛い車内。そこにはケニーも乗っていて、今はバッテリーの節約に待機モードに移行している為にぴくりとも動かなかつた。そんな彼の持ち主であるオーナーがケニーを一瞥する。

「気になりますかな？」

「なんだ、引つかかる言い方だな曹長」

「いえ、最近少尉は彼と楽しそうに会話をしていますからね。話が出来なくて寂しいのかと」

「ほう、堅物曹長も冗談を言つようになつたか。ケニーのお陰だな」
くつくつと笑うボーン。ケニーが部隊に組み込まれてから既に一週間が経つたが、今では彼はその持ち前の明るさから部隊のムードマイカーとなつていた。

ボーンの態度に不満を残したオーナー。だが何も言わず、輸送車はオーナーの不満ごと作戦地へ向けて走るのだった。

しかし、その輸送車が急停止した次の瞬間、榴弾が破裂する爆音が轟き車内の兵士達の表情が強張る。

「ほ、歩行戦車だ！！」

ボーンの指示で外へ出ようとする兵士達の背に、運転手の恐怖の含まれた叫びが木靈した。

「起きろケーー！」

その言葉に振り返りながらケニーを起動させるオーナー。運転席と荷台を繋ぐ小窓から、更にその向こうに目を向ける。そこには二メートルを越える人が装着するパワードースーツ、A国も初めとする様々な国の主力兵器である歩行戦車が銃口を輸送車に向けて立ちはだかっていた。

車内にはオーナーとケニー、そしてボーンだけが残っていた。他の皆は既に外へ飛び出しており、道の先に居る歩行戦車に向けて一斉射を行っていた。

しかし対戦車ライフルを以つても用意に貫く事の出来ない歩行戦車の装甲に対し彼らの持つ武器ではあまりにも火力不足だつた。歩行戦車が斉射する機銃が火を吹き、輸送車の外に居る兵士達を釘付けにする。その間に敵の歩兵が現れて銃撃を始めた。

「少尉、早く外へ！」

「分かつてる！ ケニー、対戦車戦だ！」

背後のボーンに応え、ケニーへ指示を送る。しかしその視界に入つたのは、自分の乗る輸送車へ向けて榴弾を打ち込んでくる歩行戦車の姿だった。

「少尉！！」

オーナーを突き飛ばす勢いでボーンに向けて押し飛ばすケニー。それと同時に装備していた拳銃を引き抜き、刹那の間を置いて引き金を絞る。瞬間、輸送車の目前で破裂する榴弾。

拳銃を元に戻すと出口へ向かつて車内を走りだすケニー。既にオーナー達は外へ出ていて、敵に向けて銃撃を行っていた。

「ケニー、お前の得意分野だ。任せる！」

「サー！」

心強い答えを返すケニー。その声を聞き、

「フォーマンセル！ これより敵を駆逐する！」

全兵に向けて号令を発するオール。それぞれが事前の打ち合わせ通りにチームを組む。だがその合間に歩行戦車が撃ち込んだ榴弾が輸送車に命中し、次々と破壊されていく。

絶え間なく続く両軍の破裂音爆破裂音に紛れ、ケニーは一人、敵へと進軍していく。

しかし敵の銃撃が集中する両軍の間まで来ると、左横への跳躍。そこにあるのは廃屋となりつつある建物の壁。それを自身の重量をもって突進して破壊しつつ中へと入り込んだ。そこに居た一人の敵兵は驚きに体を硬直させていたが、それらの頭を拳銃で正確に射抜く。

「撃てー！ 敵の足を止めろー！」

ライフルを手に物陰から物陰へと移動し、敵を撃ち抜くオール。マガジン交換をしつつ自軍の兵士を見ると、必死に銃撃を繰り返している者が三割。銃弾を運んだり、ただ隠れている者が七割。いつもの光景ではあったが、その様に舌を打つ。

人を撃ちたくないが為に援護、それも敵への攻撃ではなく味方への弾運びと言う逃避行動に移る兵士達。その状況を開拓する為に彼女はバトロイドを欲しがったのだ。事実バトロイドは容赦無く敵を殺せるが、敵は人の形をするバトロイドを攻撃するのに躊躇する。それが人型をするバトロイドの一番の利点だった。死に難い歩兵と言われ、まだそれほどの評価を受けていないバトロイドが量産される理由もそこにあるのだ。

オールが視線を敵に戻し、マガジン交換を終えて敵への攻撃を再開させると、敵軍の位置する真横の建物の壁を破つて横腹から攻撃を開始するケニーの姿を目にして勝利を確信した。

何時の間に調達したのか、敵のライフルを使って横合いから斉射するケニー。突然の敵兵の登場に条件反射のように攻撃をする敵兵だが、その銃弾は味方をも巻き込んでケニーへと降り注いだ。

だが銃弾を全身に浴びているにも関わらず、それを意に介さずに銃撃を繰り出しながら突き進む。敵弾の雨に撃たれて人工皮膚とは

名ばかりのゴム質の皮膚が弾け飛ぶが、その下の装甲に守られて重大な損傷を負うことはない。

撃ち漏らした敵兵は無視し、歩行戦車へと向かうケニー。しかし、その身には戦車を相手に出来るような武器は無かつたのだが

「グレネード！」

オニールが注意を勧告する声と同時に組んでいた小隊員が歩行戦車へ向けてライフルの銃口下部へ取り付けられたグレネードランチャーから榴弾を発射する。榴弾は歩行戦車へ向けて真っ直ぐ飛び、着弾、爆発した。しかしその程度の攻撃で歩行戦車がどうにかなる訳ではなかつたが

「ケニー！！」

銃声の木霊する戦場で声が届いているかも分からなかつたが、ケニーはオニールの声に応えるように歩行戦車の元へと素早く接近し、ライフルを投げ捨て全力を以つて右の拳を腹へと打ち込んだ。次いで内部に仕込まれた火薬を破裂させた勢いで歩行戦車の装甲を突き破る拳。中の操縦者の体に食い込むほどにめり込んだ拳がそのままの状態で炸裂する。爆発は装甲の内部で一気に膨れ上がり操縦者の体を歩行戦車の中へと引き回す。比較的薄い背中側の装甲が弾け飛び、歩行戦車の部品と共に肉片が飛び散る。

歩行戦車を繰る人間の声が、分厚い装甲の中から聞こえてきた。そのまま動かなくなり、倒れる。右手の手首から先が無くなつたケニーは任務完了とばかりに敵陣の中を味方の方向へ向かつて走り出した。

それを確認した友軍がこれ幸いとばかりに進軍し、自分達の切り札を失つた敵兵を次々と撃ち抜いていった。

瓦礫の間を伝つて身を隠しながら自分の元へ走つてくるケニーを援護するように銃撃を繰り返すオニール。弾切れを起こしたライフルの銃口を下げ、マガジンを交換。銃撃を再開させようとした瞬間、横合いにあつた建物の出口から敵兵が現れた。オニールの存在に気付いていなかつたのか、驚いた表情を見せる敵兵。

「フツ！」

オニールも敵と同じ状況であつたに閑わらず、しかしそれに驚く素振りも見せずに敵兵の股間を蹴り上げ、その足で体を蹴り飛ばして背中から倒して首に向かつて全力で足を落とす。骨の碎ける音が足から伝わつてくるのを確認しつつ、敵兵が出てきた出入り口に向かつて視線も向けずに銃撃。そこに居た敵兵の短い悲鳴。倒れ伏した敵兵に一瞬だけ視線を向けた後、即座に中に入り込む。中にはもう一人、銃口を向けていた敵兵がいたが、オニールの登場に慌てて引き金を絞るもオニールの手がその銃口を真下に弾いて弾は床を抉つた。

逆にオニールに銃口を突きつけられると、両手を銃から離して頭の上に上げ降伏の合図を送ろうとするのだが、それよりも早くオニールの銃が火を噴き男の命を断つた。

「……チツ」

無駄弾を使つた事に対しでか、無駄な殺しをした事に対しでか、舌打ちをした後に壁に背中を着けて身を隠す。すぐ横の窓からケニーが走り寄ってきたのを確認すると、出口から自分のチームの三人と、ケニーが中へ入つてきた。

「先行しすぎですよ少尉」

「すまないな、お前の活躍について心が躍つた」

オニールと見た目だけはボロボロになつたケニーの掛け合いに、命のやり取りをする戦闘中だと言うのにチーム員から笑いが零れた。しかしそくに表情を引き締め、窓から銃撃を始める。

ほら、と言つて足元に転がつていた敵兵のライフルをケニーに手渡すと、それを片手だけで受け取る。チーム員一人に裏口へ周るよう手で指示を送ると、自分は隣の建物へ続いている壊れた壁からケニーと部下を一人引き連れて走る。隣のビルの壁はほぼ破壊されつくし、外から丸見えだった。

「少尉！」

ケニーの声が響くと、オニールの目前にライフルを持ったままの

左手が突き出される。次の瞬間、外に居る敵兵から放たれた銃弾がライフルによつて防がれた。

一瞬背筋に冷たいものを感じながらも、オールともう一人の兵による斉射によつて外の敵兵が駆逐されていくのだった。

「……よくやつたな。今回の殊勲賞はお前の物だ」

フランティーの街での一晩に渡つて続いた戦闘が一応の終わりを告げると、ケニーの背中を叩きながらオールがその戦績を褒め称えた。ありがとうございます、と言うケニーに、更に仲間の兵士達が体や頭を笑いながらバシバシと叩いていく。

化けの皮が剥がれたとでも言つべき姿になつてしまつたケニーではあるが、皆その姿に慣れたかのような反応をしていて、格好いいじゃないか等と言つている者も居た。

その様を見ながら怪我の手当をしていたボーンとオールが喜びと共に苦笑を浮かべていた。

「これで戦車戦は三度目ですか。いつもながら驚かされますな。自分が入隊したての頃は戦車と正面から力合つたら、対戦車装備をしてても一番に逃げろと教えられたものです」

「私もだよ。……まつたく、ランフィールド大尉は彼にどんな教育をしていたんだろうかな」

「敵陣のど真ん中に突つ込んで戦車を破壊して帰つてくる。それをし得る為にケニーの中身をあれほど改造しているとは思いもよりませんでした」

話を聞きながら終わりだ、と言つて包帯を巻いたボーンの腕を叩くオール。一瞬鋭い痛みを感じたが、ボーンはそれを顔に出す事無く上着を着る。

「しかしあま、そのお陰で三度も助かつた訳だ。しかしあた修理だな、あいつは。顔の方は……代えの皮膚はあつたかな？」

「腕の方はあります、が顔の方はありますんな。暫くはあのままにしておくしかないでしょう」

「そうか。……しかし、あんなオンリーワンな機体の為に代えのバンカーパンチを幾つも用意しているとは、本当にランフィールド大尉は彼を気に入っていたようだ」

「大尉の後方への要求はとあるクレーマーよりもしつこいと評判でしたからね」

クレーマーと言う言葉に、オニールがどこのどいつだ？ と聞き返すが、言葉のアヤです、と切り替えしたボーン。疑問を浮かばせながらもそうか、と返事をする。

「あのバンカーパンチもランフィールド大尉が無理を言つて作られた特注品らしいですよ？ なんでもランフィールド大尉は後方殺しと言われる程の無理難題を押し付けては無理矢理その通りに物資を届けさせるそうです。彼の言う事に反論するよりも素直に物資を用意したほうが早いと言つほどだったとかなんとか」

流石にそれは無いだろう、と眉を顰めるオニールだが、しかし実際ランフィールドの使つていたケニーを見れば、その話もりえない事ではないか、と納得してしまつのだつた。

日が落ち始めた頃合に、同じ街で戦っていた友軍との情報交換と作戦展開の指示をしあい、一旦の休息を取る事にしたオニール達の部隊。その他の部隊でも部隊長が負傷や死亡により指揮を取れなくなり、オニールと階級が同じ者しか居なかつた。大部隊を指揮した事があるのがオニールだけだつた事もあり、なし崩し的に彼女が全部隊を指揮する事になるのだが、それでも彼女の元の部隊の人員と同じか、それよりも少ない人数しかいなかつた。

皆が火を焚き、レーションを口に入れて空腹を満たしている中、

オニールはケニーを呼び出して瓦礫の上に腰掛けた。足元にはレーシヨンの入っていた空の缶詰が二つ並んでいる。

オニールの前で敬礼をするケニー。それを見届けた後、座りなさい、と自分の横を叩く。それに応じ、オニールの隣に座るケニー。

「充電は十分か？」

「はい。昼間に内に済ませました」

「三時間ほど動かなかつたものな。君の食事時間はとても長い。太陽光と言うのはよほど上品なコース料理なんだな」

くすくすと笑うオニール。その後、ふと自分の変化に気付いて小さく溜息を吐く。

「時々君がロボットだと言う事を忘れてしまう時があるよ。君に言わせて思い返してみたんだが、私はあまり笑つた事が無かつた。子供の頃から何をするにも一生懸命で笑つ余裕が無かつたんだ。それなのに、君はいとも簡単に私を笑わせてくれる」

「少尉は子供の頃、どういう子だったのですか？　どうして軍へ？」

「……父が軍人だったんだ。私が士官学校に通つている間に小さな戦闘で死んでしまつたがね。小さい頃に母も亡くしたんだが、それからは唯一の肉親の父に嫌われまいと一生懸命勉強して軍にも入つて、気付けば今の地位に上り詰めていた。ま、それも父の死で無駄に終わつたのだがな」

昔を懐かしむような、翳りのある表情で俯くオニール。しかしケニーはおどけた調子で、

「無駄ではありますんよ。おかげで私は少尉に出会えました」

そう言い放つ。本当は笑顔を向けたかったのだろうが、人工皮膚を無くしたケニーの表情は変わること無く、剥き出しの装甲だけがつた。

「まるでナンパだな。それも大尉から？」

「ええ

「大尉とはいつもどんな話を？」

「娘の話を何度も聞かされました。ケニーと言つ名前は、男の子供

が産まれた時に付けようとした名前だそうです

「そうか。……娘自慢は楽しかったかな？」

「楽しいですが、うんざりしますよ」

笑いながら言うケニー。今までのやりとりから、その言葉は本心であり、[冗談]でもあるのは分かった。

そして、ふと、オニールの脳裏に疑問が浮かぶ。

「……やはり、君と話していると君が本当は人間なんじゃないかと思えてくるよ」

「そうでしょうか」

「ああ。いくら私達人間が喜ぶような言動を選ぶようになっているとは言え、君の一言一言はいつも私の心をくすぐる。本当は中に入りが入っているんだろ？」「ええ、どうなんだ？」

そう言ってケニーの顔を両手で包むようにするオニール。しかし人工皮膚を無くしたケニーの顔からは装甲の冷たく硬い感触しか伝わってこない。

暫くそのまま見詰め合っていると、

「……馬鹿馬鹿しい事を言つたな。忘れてくれすまないと言つてケニーの顔から手を離す。同時に溜息が漏れるのだが、

「分かりました、思い出す事はしません」

「忘れると言つたのだが？」

それは了解できません、と続けるケニー。バカモノ、と返すオニールの表情は、とても楽しそうな感情に満ちていた。

「……これが戦車だと？」

怒りを隠せないオニールの目の前には申し訳程度の銃座が取り付けられただけの、ガソリンエンジンを使う旧式の軽装甲車があった。

「今用意できるのはこれだけです。ですから」

「戦車、パワードスーツ、バトロイド。それらの一つたりとも用意

出来ずにつれてきたのがこれが？ どうやら我が国は相当の資金難なようだな。前線を維持し続けなければならぬ我々に買つてくれるのはこのポンコツだけか。それとも「これは君のポケットマネーで買つてくれたのか？」

静かな口調に対し怒りをありありと滲み出しているオーナー。
それを一身に受けるのは以前にも彼女に物資を持つてきたジヨナサンだった。

「銃弾の届かない場所で着服を仕事としている奴等の頭を吹き飛ばしてやりたいよ」

「それは自分も同じ意見です」

「だつたらもう少し自分の仕事に誇りを持て。まあ、君に言つても仕方ないな。すまない、忘れてくれ」

はあ、と大きく溜息を吐くオーナー。彼女等はフランディーの街からまだ離れる事はせず、代わりの任務としてその街を拠点とする為に防衛を言い渡されたのだった。しかしそれをするにはあまりにも兵数や物資が足りず、さらには手の届く場所にある敵本国からの反撃が開始されたと言う情報まで入っているのだった。

簡易に作られた銃座や街の周囲に配置した地雷。それだけでは到底守りきれる筈もなく、しかし要請した物資は望み通りとは到底言えなかつた。

「バトロイドが一機、それも最新型さえ居れば多少の不利はひっくり返せるのだがな……」

「それはケニーを使ってみての感想ですか？」

「その前に最新型を使つた事もあるんだよ私は。まあ、ケニーも有可能だ……いかんせん、人工知能はともかく元のスペックがな」

確かに相手が戦車でも、戦車戦を主に学習してきたケニーがいれば何とかなる自信はあつた。その為の武装も要求している。だがそれは相手が一機の場合のみだつた。それ以上の数で来られれば流石のケニーでも対処しきれなくなるだろう。そもそもケニーはオーバースペックとも言える改造を施されているが、それでも量産型に毛

が生えた程度の性能なのだ。

無い物ねだりをしていてもしょうがないと、仕方なくジョナサンの差し出す書類にサインをする。

逃げるよつに去つていくジョナサンの背中を見ながら支給された装甲車に向かつて歩く。普通の車よりも高い車高の為に少し高い位置に設置されたドアを軽く叩き、

「まあ、ポンコツだと思っていたのが良く働いてくれている前例もあるからな。……ここにある以上は使うとするか」

同情と、ほんの少しの期待感を持つて微笑むオール。その背中に、

「確かにソーラーエンジンを積んだ車に比べれば性能は見劣りするかも知れませんが、未だにガソリンエンジンの馬力を超えられる車はありませんよ、少尉」

固形食糧を頬張りながら言うボーンと装甲が剥き出しのままのケニーが歩いてきた。

「エンジンの馬力があつてもどうしようもないんだよ。問題はどれだけ敵を駆逐できるかさ、曹長」

「なるほど。ああ、それとケニーの顔は……」

「あるとさ。ケニー、こつちへ来い。貼り付けてやる。幾つか持つてきたらしいから破れても代えが効くぞ」

「よかつたなケニー。これでいつも通りの男前に戻れる」

「私は美人の少尉と同じで素顔でも十分に男前ですよ。ああ、もちろん軍曹も男前です」

ありがとうよ、と笑いながらボーンが物資の確認に歩いていく。オールも口元に微笑を浮かべていたが、思い出したかのようにポケットからボーンが食べていた物と同じ固形食糧を取り出して口に入れる。もう片方の手に装甲車の上に置いてあつた、ケニーの人工皮膚が入つた工具箱を手に取つた。

周囲を見れば以前にケニーと共に連れて来られていたバトロイド達の姿が見える。しかしオールは彼らとは殆ど会話をしない。彼

らのあまり上手いと言えないなどたゞしい会話では満足出来ないからだ。

それは他の隊員も似たような物ではあり、兵士から見たバトロイド達の人気はケニーが一番高い。しかしぱニーはオールの所有物であり、何とかケニーのようなバトロイドにしようと量産タイプのバトロイドに話しかけている姿をオールは何度も目撃していた。だがケニーはランフィールドの元で長い時間対話を繰り返して今の状態になつたのであり、他のバトロイドが同じようになるにはケニーと同等の時間を掛けて教育をしなければならないだろう。

そんな事を思いながら装甲車から離れ、ボーンの後を追うオール。更にその後をケニーが続く。部下に指示をして物資を運ばせているボーンの様子を確認すると、ケニーを連れて傍の建物の中に入った。

慣れた手付きで人工皮膚を工具を使って貼り付けていった。その作業を終わらせるとケニーが笑顔を見せ、「慣れますね」と、嬉しそうに言つた。

「お前の前のバトロイドの頃からずっとだからな」「例の最新型ですか?」

「ああ。まあ戦闘には役立つたが、私に言わせてみればなんで人型をしているんだ、と言うような奴ではあつたがな。あれは君以上に滅茶苦茶だ。最早人の形をして相手の戦意を削ぐと言う目的すら達せないよ、あれは」

その様を思い出したかのように苦い顔をするオール。弟分でもある最新型のデータを再生し、分かります、と言つてケニーも苦笑を浮かべていた。

「彼は何故?」

ケニーが問うと、その時の事を思い出しながら言葉を紡ぐオール。

「私を守つてな。使用者の安全が一番の優先事項になつていたから

」

だろう。まあ、彼と言つ犠牲のお陰で私は任務を成功させる事がで
きた

「ああ、だから少尉はバトロイドを信用しているんですね」

「そう言う事だ、と言い、取り出していた工具を片付ける。

「……大尉は何故死んだ？　君の優先事項は使用者の安全が最優先
ではないのか？」

「いえ、そうなつております。ですがその時に言い渡された作戦
内容は大尉を守る事が出来なくなるものでした。そして大尉は一番
に任務の成功を優先しろと言つておりました」

なるほどな、と溜息を吐くオニール。そのまま踵を返し、箱を持
つて装甲車の所まで歩くと一旦扉を開いてから中に箱を放り投げた。
「ランフィールド大尉とは生きている間にもう一度会つてみたかつ
たな。ただのロボットに、人の心を和ませられるような機能を持た
せた手腕を見てみたい」

「少尉、私には元々そういう機能がついておりますが」

「お前の場合は異常だよ」

くく、と笑いながら言つオニールは嬉しそうだつた。異常ですか、
と意味が分からぬ様子を見せるケニーだつたが、オニールの嬉し
そうな表情を見てどうでも良くなつたように笑顔を見せた。

やがて小さく溜息を吐くと、装甲車に寄り掛かつて暗い表情を見
せる。

「……これから敵が来る。補給は間に合つたものの増援が間に合わ
なくてな、今度ばかりは私達も危ないかも知れない」

「いえ、少尉は私が守ります。大尉を守れなかつた分も全力で守り
ます」

「私だけ守つても仕方ないさ。……だが、その言葉は嬉しいよ。今
まで私を守りうとした男なんて居なかつたからな。逆に守つてばつ
かりさ」

そう言つて顔を上げてケニーを見詰めるオニールの目には、ケニ
ーに対する信頼以上の何かが込められていた。

空を見上げる。暗く厚い雲が広がっていた。雨は降りそうになかつたが、しかしこれから起こるであろう戦いへの不安は一層に募つた。

「少尉、頑張りましょう。増援など無くとも敵を全滅してやるのです」

「……能天気だな。だが」

車から離れ、ケニーの顔を両手で包む。ついで今までのむき出しの装甲の感触とは違い、ゴムの様な肌の感触が伝わってきた。段々と二人の顔が近付いていく。鼻先が触れ合つほどの距離まで近付いてくると、こつんと、一人の額が軽くぶつかった。

「私は君のそんな所が好きだよ」

それだけ言うとケニーから離れるオニール。

「……ケニー」

いつものはきはきとしたまさに軍人と言つかのよくな声ではなく、歳相応の女性らしい優しげな声でケニーの名を呼ぶ。ケニーもそれに応えると、

「車の中で待機モードだ。きちんと私が起こしたら起きるんだぞ?」まるで子を諭す母のように言つと、了解しましたと車の後部座席のドアを開いて中に入り、待機モードへと移行して動かなくなつたケニー。

オニールは窓の外からその様子を眺め、

「……参つたな」

そんな事を呟きながら自分の仕事に取り掛かる為にその場を離れるのだった。

戦争の音が近付いてきた。

全てを踏み均す戦車の履帶の音は遮蔽物の無い静かな場所であれば一キロ以上先からでも聞こえてくる。だが今回の場合は一キロ等と言つ近い距離ではない。もっと遠くからであった。それはすなわち戦車の数が一両や一二両どころの数では無いと言つ事だ。

さらには戦車を護衛する歩兵。そして歩行戦車。平時であれば通常の拠点となるフランディーの街を通り過ぎれば、A国にとつての敵の本拠地である、首都ブノスレスがあつた。そしてフランディーの背後は軍隊が越えるには少々辛い小山だつた。

つまりオニール A国にしてみればフランディーは敵国へ責める為の足がかりであり、敵にしてみれば奪われる訳にはいかない重要な拠点であつた。そこを奪われたとあつては、敵も取り返すのに必死なのだ。

しかしそんな重要な場所であるフランディーを制圧出来たとは言え、その消耗は激しく今のオニール達には敵の攻撃を真っ向から受ける為の装備が全く足りない。故に今回の彼女達の任務は増援が到着するまでの敵軍の足止めとなる訳だつた。しかし敵軍を前にした現時点で、味方増援到着予定期間はほぼ丸一日足りない。彼女達は丸一日、圧倒的な武力を持つ敵軍と戦わなければならないのだった。そんな事を考えながら、オニールはその街で一番高い、首都圏の高層ビルに匹敵するような街のシンボルとも言える時計塔の中から双眼鏡を使って敵の大群を眺めていた。日の光を受けた時計塔の影は街の外へ伸びるほど長い。傍にはいつも通り、ケニーが立つている。

る。

「……壯觀だな。機会があればあれほどの部隊を率いてみたい」

「大変ですよ、あれらを率いるのは」

「なに、言つてみただけさ。恐らくそんな機会は無いだろう」

そう言つてケニーと共にエレベーターに乗り、屋上と今居る十階、そして一階にある二つのボタンの内、一番下のボタンを押す。静かな駆動音を立てながらエレベーターは降り、一階へ到着すると扉の前にボーンが立つていた。

「どうでした？」

「百万ドルの絶景だ。世界遺産に登録してもいい」

「なるほど」

出会い頭で冗談を言つてくるオーナー。彼女の性格を考えれば有り得ないやり取りに思わずボーンが笑みを浮かべた。しかしオーナーはそんなボーンの考えを勘違いし、戦闘前で高揚しているものと勘違いして頼もしいと思っていた。

街の中ではいたるところにバリケードが作られ、対戦車地雷を初めてする数々の罠が敵が進軍してくるであろう場所へ仕掛けられている。

それだけで何とかなればいいのだが、そつは上手く行く筈は無いだろうとオーナーは考える。しかしそれは全ての兵が承知している事であり、皆一様に自分の命の危機を感じ取っていた。

「味方の配置は？」

「既に、街の周辺に設置した地雷を含めて、三百メートル以内に接近した後に攻撃開始となります」

「随分と引き付けるじゃないか」

「戦力差が歴然ですからな。なるべく一気に減らしておきたいのです」

良い判断だ、とボーンの肩を軽く叩く。それを合図にそれぞれの配置へと向かう。オーナーとケニーは共にその時計塔付近で味方に指示を出しつつ後方支援。ボーンは街の出口近くでの待ち伏せ。

戦闘前の緊張感に包まれ、早まる鼓動を抑えながら兵士達が武器を手に敵を待つ。神に祈る者も居れば愛する相手を想う者も居る。既に敵軍の進軍音ははつきりと聞こえる距離まで近付いていた。

敵が出す騒音、それだけが周囲を包み込む。発狂しそうな程のその空白の時間は、しかし街の外でする爆裂音によつて解き放たれた。腹の底に響く轟音。地を揺らす衝撃。外に配備していた部隊の放つた対戦車ロケットが見事に戦車に命中し、爆発した。彼らが少数の部隊だつたとは言え、敵の護衛兵に見つからずに戦車を攻撃出来

たのは幸運だつた。同時に攻撃を開始した街中の部隊からの射撃により、戦闘の火蓋は切つて落とされた。

予想はしていただろうが、突然の攻撃に虎の子の戦車を破壊され焦つたのか、進軍速度を速める敵部隊。先頭を行く歩兵が一番に街中へと到着するも、待ち伏せていた兵達に倒される。更に続いた歩行戦車が地雷を踏み、周囲の歩兵と共に吹き飛ぶ。それが何度も繰り返されるも、それでもやつと敵軍の一割に損失をえた程度だった。

次第にその物量差に圧され始め、後退を余儀なくされる。数で負けていても仕掛けた罠や効果的な待ち伏せによつて何とか持ちこたえていたが、それでも地雷を突破してきた戦車による攻撃の前には成す術がない。

戦闘開始から三時間が経過した時、敵軍の損傷は一割五分、オール達の部隊は既に半数の損壊を出していた。

「……いけませんね、これは」

「ああ。曹長とも連絡が取れない」

ケニーの言葉に応えるオニールは、見た目こそ冷静だつたがその焦りは計り知れなかつた。一日持たせなければならぬ戦闘の中、たつた三時間で半分の損壊。損傷率が三割を切れば全滅と判定される中、この状況は絶望的だつた。

建物の屋上へと登り、スナイパーライフルを構えるケニー。その横で観測手としてオニールが無線で指示を送りながら周囲の警戒をしていた。

息の合つた二人の狙撃によつて何人の敵兵がその命を落としていくが、しかしそれでも全般的に見れば効果は微々たるものだつた。オニールの覗く双眼鏡に、バリケードを踏み均して走る戦車の姿が見える。その後に続く歩兵と歩行戦車に向けて舌打ちをし、ケニーにその場を離れるよう伝える。

「不味いな、敵の数が予想より多すぎる。それに戦車もだ。向こうは是非でもこの街が欲しいようだな」

「ならば明け渡して降伏しますか」

「それはそれで面白くない。……レールガンでもあれば奴等の鼻を明かせると言うのにな」

「あれはまだ小型化に成功しておりません。海洋戦艦にしか搭載されてませんよ」

「分かつてゐる。言つてみただけだ」

屋上から下へ続く階段を降り、階下の部下に状況を伝える。無造作に置いてあつたロケットランチャーを取り、ケニーに渡す。自分はいつも使つてゐるグレネードランチャーを付けたライフルを手に取つた。

「……お前達のようなロボットが生まれてきていると聞つのに、我々人間は百年近く変わらず火薬式の銃だ。先進の我が国ならばビームの一つや一つは出て欲しいね」

眩ぐオールの本心はこの状況を開拓できる武器を求めるものなのだが、それを聞くケニーは、「ビームは面白くありません。せつかくの私の体が吹き飛んでします」

そう言つて笑いを誘う。しかし余裕の無いオールは笑わず、どこか寂しげな表情をケニーは見せた。

そんな中轟く衝撃と音。近くにどこからか飛んできた戦車砲が着弾したようだつた。

「チツ……後退も考えねばならんな」

誰にも気付かれないように眩いたつもだつたが、その声は近くに居た部下へ届いていたらしく、一瞬その表情が強張つたのが見えた。

代理とは言え今は彼女が部隊の隊長であり、責任者だつた。そんなつでも冷静で居なければならぬ自分が部下を不安にさせる不

用意な言葉を吐いてしまつた事に思わず自己嫌悪をしてしまう。「……もうすぐ敵がここまで来る。前線部隊はもう居ないものと思え。最悪は……撤退だ」

しかし事実は事実であり、オーナーは部隊長として非情な判断を下す外なかつた。

そんな事をしなければならない自分に嫌気が差して振り返ると、そこにはケニーのいつも通りな笑顔があつた。

「随分と楽しそうだな？」

「ええ。まだまだ私達には勝機がありますからね」

「勝機だと？」

「はい。ようは増援到着まで敵の足を止めればいいのですよね？ 今一番厄介なのは戦車です。ならば戦車の足を止めればいいのです」

それが出来れば オーナーがその言葉を吐き出そうとすると、ケニーの視線が自分を向いていないのに気付く。その視線の先を追つていくと

「まさか、あれを？」

思わずオーナーの顔に苦笑いが浮かぶ。そこにあつたのは街のシンボル、時計塔だつた。

「敵部隊が進行してくるまでの間にあれを倒壊させればその瓦礫で足止めが出来ます。そうすればこちらが守るべき場所、敵が進軍してくる場所をある程度限定させる事が出来るので以後の戦闘が楽になるかと。もつと欲張れば、移動中の敵に向かつて落ちるようにすれば」

「あれを壊すのにどれ程の爆薬が必要になる。それに倒れる方向の計算は？ 確かに効果的ではあるだろう。だが私達に建築知識のある者は居ないぞ？ もちろん発破作業なんて物もした事はない。まさか君が出来るとでも？」

遠くから聞こえる戦闘音が少しづつ近付いてくるにつれ、苛つきが大きくなるオーナー。いつもは冗談だらう、と笑つてあしらうのだが、今はケニーの言葉にすら突つかかってしまう。

しかしケニーは笑顔を崩さず、

「出来ますよ、ランフィールド大尉から教わりました。大尉は発破のプロでしたから、それを自分が教わりました」

思わず啞然とするオーナー。ふと背後を振り返つてみると、部下達が口をぽかんと開けて驚いた表情をしていた。自分もそんな顔をしているんだろうか、等としつ考へが一瞬頭を過ぎるが、頭を軽く振つてケニーに向き直る。

実際その言葉は彼にインプットされた発破のデータに基づいた事であり、その事も含めてケニー自身は「冗談で言つたのだったが、この状況では皆ケニーの言葉を冗談と思つ余裕が無かつた。

「だが火薬は？ 手持ちだけで足りるのか？」

「私のバンカーパンチを使ってください。予備の分も全て。必要であれば二つも使いましょう」

そう言つて持つていたロケットランチャーを掲げる。

「あの時計塔はエレベーターを支柱に階層が一つあるだけで中は空洞、見た目よりも脆いです。これだけの爆薬があれば倒壊させることは可能です」

自信に満ちたケニーの表情を暫く見詰めていると、思わず顔を綻ばせ、肩の力が抜ける。

「やつてみようじゃないか。計算はどれくらいで出せん？」

「もう既に。丁度今私達が居る場所へ倒せば時計塔の瓦礫は街の外れまで届くので、敵がこちらに来るには一度街を出るか倒壊地点の反対まで回らなければならなくなります」

「ははは！ 初めからそのつもりだったか。ええ？ まあいい、

皆聞いてたな？ 作業開始だ。アルファ、チャーリーチームはケニーと一緒に作業にかかり。リマ、パパチームは私と一緒に来い。敵の進行を食い止めつっこちらへ誘い込むと同時に他のチームに命令を伝える！ ケニー！」

既に作業班と共に時計塔へ向けて走りだしていたケニーを呼び止めるオーナー。その声に立ち止まると、

「よく教えてくれた！ 言つたからには失敗するなよ！？」

先ほどまでと打つて変わって、今にも踊りだしそうなほどに嬉しそうな表情を見せるオーナー。彼女のそんな姿が嬉しかったのか、

ケニーも笑顔と敬礼を返して先を行つていた作業班に向かつて走り出した。

それを見届けてから走り出すオーナー達。すぐ近くにまた砲弾が着弾し、地面を揺らしたが、しかし今の彼女はそんな事も気にならないほど興奮していたのだった。

段々と空が赤く染まり始めてきても、フランディーの街では戦闘が続いていた。無線を使い、それを聞いている全ての味方へ作戦を伝えると、オーナー達も戦闘を開始した。倒壊地点周辺に配置していた小隊もオーナー達と共に敵の誘導をする為に合流する。

建物の影に隠れて銃撃をするオーナー達。敵を引き付けた結果、敵の総数はオーナー達が寄せ集めた囮部隊の数を遥かに越えている。少しずつ後退して作戦決行までの時間を稼ぐ。ケニーから入った無線では一時間ほど掛かるそうだったが、その予定時間に既に残り三十分と言う状況になつていて。

現在オーナー達の居る場所から三百メートルほど後方が倒壊予定地点であり、味方の援護もあって順調に敵をその場所へと誘いこめていた。最高の状況は倒壊に敵を巻き込む事ではあるが、それを出来なくともここまで引き付ける事が出来れば敵は大きく迂回せねばならなくなり、増援到着までの時間を稼ぐ事が出来る。

オーナー達が瓦礫の陰から体を出し、敵に狙いをつけずに引き金を絞る。運良くその弾丸は一人の敵兵の体を射抜いた。後方からの狙撃手による狙撃で更に数人の敵兵が倒れていく。だが敵の後方から履帶の駆動音を響かせながら現れた戦車を目にし、その場に居た者全員の顔が一気に青ざめる。

舌を打ちながらオーナー達が物陰に身を隠し、手で後退するように仲間へ指示した。

簡易的に掘られた塹壕に転がるようにして入った瞬間、今まで彼女の居た瓦礫に向かつて砲弾が打ち込まれる。耳をつんざく轟音と

体を震わす衝撃を頭を下げながらやり過げすと、塹壕の中を通りて後退を始める。

だがその戦車の他に到着した敵増援によつて激しさを増す攻撃によつて仲間は次々と撃たれていき、後退も難しくなり始めていた。

「……あと、二十分……！」

これから倒壊する予定の時計塔で時間を確認しつつ、埃塗れになつた体に活を入れて走る。兵隊は走るのが仕事。それを信条とするオニールは走りながら時折振り返り、仲間の生存の確認と追つてくる敵兵への威嚇をする。

商店の立ち並ぶ道を走つていると、突如洋服店の上から人影が落ちてくる。思わず銃口を向けるが、それはケニーと共に連れて来られた量産型バトロイドだった。

バトロイドがオニールを援護する為に敵に銃弾を放つ。それを見てオニールがバトロイドの脇を通り抜けようとするが、その瞬間、バトロイドによって洋服店の中へと突き飛ばされた。

「何を」「^b^v

思わず口に出た不満の声は、しかし戦車砲の着弾する爆音に搔き消された。見れば洋服店の入り口は着弾の衝撃で瓦解している。それは、店の外でオニールを援護していたバトロイドも同じだった。足元へ転がつてくるバトロイドの腕。それを歯噛みしながら睨みつけるが、すぐに立ち上がりて裏口へと駆け出す。

気付けば手持ちの予備マガジンが残り一つ、それをライフルに装填された残り数発しか入つていないマガジンと交換する。そしてまた走り始めるのだが、三十メートルほど後方に追いついた敵兵からの銃撃に遭い、地面を転がりながら崩れた瓦礫の陰に入った。

自分に追従する味方は無く、敵は三人。その瓦礫から出ても次の障害物まで移動するのに敵からの銃撃に遭うのは必至だった。

「最悪だ」

そう言わずにいられず、瓦礫の陰からライフルだけを出して威嚇射撃をする。それに反応するように敵からの反撃があり、否応に

もその場に釘付けにされてしまう。

「流石にこの状況ではな……私もここまでか」

ホルスターから拳銃を抜き、瓦礫から顔を出して一瞬敵の位置を確かめる。敵もオールの様子を確かめる為に顔を覗かせていて、お互いの視線が合うとすぐに銃撃が始まった。

体を縮ませて瓦礫の中に隠し、拳銃だけを外に出して頭に焼き付けた敵の位置に銃口を向けて無造作に数初撃ち放つ。

だが、幸運な事にその内の一発が敵兵に当たつたらしく、短い悲鳴が聞こえてきた。

「はは、心眼でも目覚めたか？」

死を前に気分が高揚しているのか、笑顔が浮かぶオール。しかし間髪入れずに始まる敵の反撃。銃声は三つ、当たりはしたが致命傷になつた訳ではなかつたようだつた。

一矢報いる事は出来たか。そんな事を考える彼女の脳裏に、ケニーの笑顔が浮かんだ。人口皮膚から作られる人工的な笑顔。だがオールにはその笑顔が堪らなく眩しく見えていた。平均よりも小さな胸が、戦闘で高鳴つた鼓動とは別の脈を打ち始める。

参つた。と口にしながら小さく溜息を吐き、反撃を始めようと拳銃を瓦礫の外へ出そうとした瞬間、自分が向かおうとしている方向から、一人分の足音が近付いてきた。

その方向に向けて敵の銃撃が始まるが、聞こえてくる音は悲鳴ではなく銃弾を弾く音と、その攻撃を受けても変わらず近付いてくる足音。

「少尉！」

機械音声の名残がある聞き慣れた声。ケニーの声だつた。

走りながら拳銃を敵兵に向け、三発発射される。火気管制によつて放たれた弾丸は正確に敵兵を射抜き、即座に倒してしまつた。

嬉しさと驚きの混ざつた表情を浮かべ、自分の元に走つてくるケニーの顔を見詰める。

「足はまだありますね？」

「あ、ああ……まだ私は死んでいないよ。だがどうしてここに？」

「爆薬の設置は終わったのですが敵の進軍が思つたよりも早いです。どれ程の友軍が安全圏まで来れるかは分かりませんが、少尉を失つてはこの部隊は鳥合の衆となります。だから連れ戻しにきました」バトロイドとその所有者には、それぞれの居場所が分かるようになつて、発信機を持たせるようになつていて。オニールからの命令の爆薬の設置作業が終わり、ケニーは本来の最優先事項である自分の所有者の護衛の任務に戻つたのだった。

「行きましょう」

「わかった」

拳銃をホルスターに戻し、ライフルを手に立ち上がるオニールはケニーが持つてきていた予備マガジンを受け取ると同時に走りだした。

倒壊予定時点を後方に置いた、敵を足止めする最終防衛ラインに辿り着いたオニールとケニー。そこには大勢の友軍が合流をしていて敵を待ち伏せていた。通路の奥から時折見える歩行戦車の姿にそれを見た兵士の顔が引き締まる。屋上に配置している狙撃兵が断続的に狙撃を行い、通路の奥からも銃撃戦の音が聞こえてくる。

残り時間は既に十分を切り、後は十分に敵を引き付けた後に安全圏への離脱を図るだけだった。だが幾ら専門の知識を用いたとは言え急な計算に基づいて行われる発破であり、安全圏が何処までなのかが把握しきれないでいる。その不安も重なり、兵達の緊張は極限まで達していた。戦線を維持できなくなつたのか、通路で戦つていた兵が戻つてくる。

「……頃合か。後退だ！ 退くぞ！！」

腹の底から声を出し、仲間に伝える。それと同時に通路から敵歩兵が現れ、逃げ戻つてくる友軍の支援をしながら後退を開始した。

銃を撃てない者から一田散に後退を初め、オニールは残つた量産型バトロイドや未だ血の氣の溢れている者達と共に後退する味方の支援をする為にその場に残る。

「自分で最後です、後退を始めます！」

銃撃を続けるオニールの隠れる瓦礫に通路から逃げてきた若い兵士が滑り込んでくると、必死な声で叫んだ。

「分かつた！ ここまで生きて帰つてきたんだ、あの古時計に潰されて死ぬなよ！」

了解です、と返事をして威嚇をしながら下がつていく若い兵士。それをきっかけにオニールも後退を始める。

だがその瞬間、通路の出口に設置した対戦車地雷の爆音が響く。足を吹き飛ばされて倒れる歩行戦車。しかしその後ろから続いて現れる三体の歩行戦車と歩兵の姿に思わず舌を打つ。

歩行戦車から次々と放たれる機銃と榴弾による攻撃で動く事が出来なくなるオニール。だが不意に他の場所から攻撃をしていたケニーが飛び出した。

「ケニー！？」

「少尉！ 私が引き付けます、その間に退避を！」

ケニーが手に持つていたのは大型のアンチマテリアルライフル、所謂対戦車ライフルだつた。五十口径もの大型ライフルではあつたが、それを以つてしても歩行戦車の装甲を破るには至近距離からの射撃を行うしかない。ゼロ距離でのケニーの切り札であるバンカーパンチも時計塔倒壊作戦の為に使いきり、今は通常のマニアピューラーを使つてゐる。

「死ぬ気か！ 戻つて来い！」

「死にません！！」

オニールの制止も空しく、片手にライフルを担ぎ、片手に拳銃を握つたケニーは単身で敵を食い止める為に前へと進んでいく。小銃

程度ならば容易に弾いてしまう装甲を持つ、まさに人の形、人の大きさの戦車と言えるケニーではあるが、たつた一体で何十もの歩兵と戦車を相手にしてしまえばその結果は火を見るより明らかであった。

「ケニー！」

声は聞こえているだろうが、オニールの声に返事をする事もせず戦闘を続けるケニー。部下がオニールの肩を強引に引っ張り、後退を促す。

命令を聞かないケニーだが、しかしバトロイドは使用者を守る為に動く。仲間を守る為に、最終防衛ラインを守る為に。それが結果はオニールを守る事に繋がるのだ。それは他のバトロイド達も同じだった。

彼らはケニーとは違い、戦車戦に秀でる訳ではない。だがそれでも戦車に対抗するには人間よりも有効だろう。

「お前は確かに命令を守ってる。だが……馬鹿野郎だ、お前は……ツ！」

ケニー達を逃がす為にその場に残りたい気持ちは強い。しかし、それを行うのは兵士として、何よりも指揮者として愚かな選択だった。

故にオニールはケニーを見捨てるような想いでその場から後退を始める。

その姿を見届けるケニー。

いかに彼が旧式とは言え歩兵相手であれば無類の強さを發揮する。それでも敵の全てを防ぎきれる訳は無く、本人も歩兵に逃げられるのは仕方ないと判断していた。彼が防ぐべきは戦車なのだ。

自分の機能停止 死を自分の人工知能の中で予測しながら、自分に対戦車戦を教えてくれた前の所有者ブルック・ランフィールドへの感謝の気持ちを思い浮かべながら、彼は死地で、己と同じ体を持つ仲間達と共に戦うのだった。

ケニーが計算した安全圏まで後退をする途中、オニールは突然の暴挙に出た。時間を稼ぐ為に取り残されたケニー達を助けに行こうとしたのだ。

「待つてください少尉！ もう爆破は始まるんですよ！」

「十分だけ延ばせ！ それまでにあいつらを連れて帰る！」

部下が止める声を聞かず、乗り捨ててあつた軽装甲車に乗り込む。キーを回してエンジンを掛けると、オニールの耳にあまり聞き慣れないガソリンエンジンの駆動音が響き始めた。

「ケニーは俺達の為に命を張つてるんです！ そこに少尉が行つてどうするんですか！？ あいつの気持ちを汲んでくださいよ！！」

「黙れ！ お前は仲間を見捨てるのか！？ この馬鹿野郎！」

言つて、その自分が吐いた本当の意味の馬鹿げた言葉に嫌気が差す。自分こそ初めはケニーを見捨ててここまで逃げて来たのではないか、と。

「……なら俺も行きます！ 俺だつて仲間を助けたい、少尉一人に行かせる訳には」

「だからお前は馬鹿なんだ！ これは……これは私の我慢だ」

段々と消え入りそうな声で呟くオニール。その言葉を聞き取れず、しかし上官を一人で行かせる訳には行かないその男はオニールに食い下がるのだが、それを無視してオニールは車を発進させてしまった。

サイドミラーを一瞬見ると、腹立たしそうに被つていたヘルメットを地面に投げつけている部下の姿が目に入る。

「……すまない。でも、ケニーは……ケニーは仲間じゃない。私の……だから、お前達まで命を張る必要は無いんだ」

ステアリングを握るオニールの顔は厳しい。戻る道中、追撃してきた敵兵を睨みつけながら最高速で通り過ぎる。車体には何十もの銃弾が浴びせられるが、流石に歩兵の小銃程度では傷が付く程度だった。

サスペンションがなんら意味を持たない悪路を懸命に走らせると、すぐにケニーが戦闘をしている場所が見えてくる。その場に留まり続けて銃撃をしている歩行戦車が三体。その様子を見ている限りではまだ戦闘は続いているようだった。

激しい銃弾の雨に撃たれ、軍服と共に人工皮膚が剥がれ落ちたケニーの体は装甲が剥き出しになっていた。その装甲には所々に凹凸が出来ていたり、銃弾がめり込んだりしていた。

歩兵の物よりは口径が大きいとは言え、歩行戦車の機銃でもケニーの装甲を完全に貫く事は出来ない。故に気をつけねばならないのは榴弾の直撃だけだった。

周囲にはバトロイドの残骸。戦車戦のプログラムをされていない彼らが戦車相手に歩兵装備で敵う訳も無く、無残に散ってしまった。今回の戦争から投入された彼らではあったが、そうやって目の前で破壊されていく姿を見るケニーはまるでそれが当然とでも言うかのようであった。いや、事実バトロイドは使用者の盾となり剣となって戦うのが勤め。その姿こそが彼らの本来の姿なのだ。

戦車並の装甲を持つ機敏な歩兵がまるで蜂のように全速力で戦場を駆け回っては対戦車ライフルによる高火力の一撃をお見舞いする。疲れを知らないバトロイドにこそ出来るその戦法は、搭乗者の動きに追従しきれない歩行戦車の反応の鈍さにとつては天敵とも言える戦法だった。

友軍が逃げていった方向には、ケニーによつて二体の歩行戦車が装甲の薄い背中に大穴を開けられて倒れている。さらに周りには歩兵が数人倒れていて、たつた数機のバトロイドによつてもたらされたその被害に敵は焦つていた。

瓦礫の陰に隠れ、ライフルのマガジンを交換する。それが終わるとすぐに陰から飛び出し、一体の歩行戦車に向かって走りだした。自分に向かってくる敵に向かい、機銃を齊射する歩行戦車。その内

の数発を頭部に喰らいながらも、ライフルを向けて三発立て続けに放つ。

大口径のライフルによる攻撃も距離が離れすぎて歩行戦車の装甲を貫く事は出来なかつたが、銃弾を発射した際に起つる、射撃の反動を抑える為の銃口部のマズルブレー キから吹き出した風圧によつてケニーの周りに土煙が上がり、姿が隠れる。

次の瞬間、土煙の中から一つの影が飛び出し、歩行戦車の視線がそちらに向く。その影の正体がケニーの投げた瓦礫だと気付いた時には、ケニーはライフルを構えながら目前まで、そのライフルで装甲を打ち破れる距離まで近付いていた。

ケニーが引き金を絞る。その瞬間 別の方向から狙いをつけていた歩行戦車が放つ榴弾がケニーを直撃する。

ライフルを握つていた右腕が千切れ飛び、ケニーの体が大きく飛ばされて地面を転がる。地に落ちたケニーが剥がれた装甲の隙間から火花を散らしながら千切れた右腕に一瞬アイカメラの視線を送る。痛みを感じない彼はその程度で機能停止に陥る事は無い。右腕が破壊された事で起こる機能低下を確認しながら残つた左腕と上手く動かない足を使って体を引き摺りながら物陰へと移動しようとする。悲鳴を上げる事もない。痛みに悶える事もない。彼はどれだけ人間に近かろうと口ボットなのだ。

その間も敵からの銃撃は続き、立て続けに銃弾を浴び続けるケニーの体は段々と壊れていった。

しかし幸か不幸か、積み上がつた瓦礫の上に落ちたケニーは何とかその下まで落ちる事が出来、敵からの銃撃から一旦逃れる事が出来た。しかしそれまで、彼にはもうそれ以上動く事も、攻撃を続ける事も出来ない。

まだ無事な時計塔を見て発破予定時間を確認する。既に予定時間を過ぎていた。だが爆発はまだ起こつておらず、何か不手際があつたのかと心配する。そんなケニーのプログラムの中でオーナーの発信機が近付いてきている反応を確認した。ノイズの入り始めたアイ

カメラに一台の軽装甲車が自分の方向へ向かってくるのが目に入った。その運転席には自分が守らねばならない人間が乗っていたのも、彼にはすぐに分かった。

オニールの目に、敵弾を受けて吹き飛び、瓦礫の陰に隠れたケーラーの姿が目に入った。自分の顔が一気に青ざめたのを知りつつも、アクセルを踏む足にさらに力を込める。

瓦礫の周りを回つて、自分達を苦しめたバトロイドに止めをさそうとする歩行戦車の背後にブレーキを踏む事無く近付き、躊躇う事無く突っ込むオニール。

自分に近付いてくる装甲車に歩行戦車の搭乗者が気付いた時には既に避ける事が出来ない距離まで近付いていて、オニールの狙い通り、装甲車は歩行戦車を跳ね飛ばしていた。

その衝撃に体を大きく揺らしながら必死にハンドルを切り、車体を安定させる。そのまま瓦礫の傍を回り、先程の追突によって半壊してドアが外れてしまっている助手席側をケニーの方に向かながら急ブレーキを掛けた。

「ケニー！ 捕まれ！」

もはや破壊されたと見なされてもおかしくないケニーに向かって右手を伸ばす。その手を取るべく、ケニーも残った自分の左腕を伸ばす。だが損傷が激しく、オニールの元まで手が伸びる事は無かつた。

「くつ！」

回りこんだ歩行戦車の機銃が車体を穿つ。だがケニーとの戦闘で榴弾を使い尽くしたのか、機銃以上の破壊力を持つた攻撃はしてこなかつた。その攻撃を装甲車の装甲はなんとか防ぎ切つていた。

「立て！ 早く乗るんだ！」

助手席に移動し、車の外まで手を伸ばす。その手がケニーの手に触れようとした瞬間、

「危ない少尉！」

発声機器は無事だつたのか、以前と変わらない調子で、しかしオニールの危機を知らせる言葉を放つケニー。その体が万全であれば車内に押し込むなり外に引きずり出すなりをして彼女を守れただろう。だが今の彼にはそれが出来ず、車体に、瓦礫に、ケニーの体にオニールの伸ばした腕に歩兵の放つ銃弾が何発も浴びせられたのだった。

飛び散る血と肉片。二の腕に銃弾をまともに喰らつた所為で肉が骨が弾け飛び、皮一枚で繋がつているような状態になつてしまつたオニールの腕。苦悶に顔を歪めながら車体から滑るように外へ出るケニーの体を抱え込んで瓦礫の中に隠れる。

「何故来たのですか！ 爆破は？ 失敗したのですか！？」

「……お前を助けに来たんだ。爆破は……あと五分もすれば始まるぞ」

言いながらオニールは既に腕として機能しない自分の右腕を強引に引き千切り、投げ捨てる。痛みに氣を失いそうになるのを辛うじて堪えた。痛みに麻痺した頭で自分のものだった女性らしい細腕を眺め、その腕でどうやつて重い銃器を持っていたのか、などと考えた。

そんな思考を振り払い瓦礫の陰から一瞬顔を覗かせると、敵歩兵が少しづつ自分達に向かつてきているのが見える。彼女の武器は車内に置きっぱなしで、手持ちの拳銃が一丁あるだけだった。

「ここで終わりかな。二十六年、思えばつまらない、短い人生だったよ」

自棄気味に言いながら瓦礫から身を出し、敵兵に銃撃する。オニールの腕に銃弾が被弾しているのを遠くから見ていた敵兵は油断していたのか、突然の反撃に被弾して倒れる。

痛みから脂汗が浮かんだ額を拭いながら、敵兵に向かつて威嚇をし続ける。装甲車の防弾窓の向こうから近付いてくる歩行戦車の姿も見え、口元に苦笑を浮かべながら全弾撃ち尽くした拳銃を放り投

げた。

「だけど、君と一緒にならばそれも悪くない。まつたく、君と出会つてからまだ一ヶ月も経つてないが……今まで生きてて一番幸せで楽しい時間だったかも知れないな」

そう言つてケニーの顔をそこで始めて見詰めた。人工皮膚が剥がれ落ち、剥き出しになつた敵弾を受けて歪んだ顔。そんな、人ならざる顔であつたがケニーはそれを愛しく想い、自分の胸に抱きしめた。

だが その小さい胸の中で、ケニーは嬉しそうに言葉を紡ぐ。

「少尉、大丈夫です。私達の勝ちです」

「はは、ついに人工知能もおかしくなつたか?」

「私は正常ですよ。それの証拠に」

その時、オニールの耳に敵弾が瓦礫や装甲車を穿つ音とも、歩行戦車の駆動とも違つ音が聞こえてきた。それは以前に ケニーと出会う前に聞いていた音だつた。

「AAA - 17Aハワードスマス、通称デイウォーカー。私の弟です」

それは以前、オニールの所持していた最新型、戦闘に特化したバトロイドであつた。人の形をしつつも、足裏に付いたホイールによる高速移動、背中に装着したバックパックから伸びる一本のフレキシブルアーム、赤く光る二つのアイカメラ。そんな最早人の形をした悪魔のような様相で迫るデイウォーカーがオニール達に迫る歩兵を瞬く間に殲滅した。

そのまま装甲車の向こう側に居る歩行戦車へ迫る。ケニー以上の機動力で迫るバトロイドに鈍重な歩行戦車がまともな反応など出来る筈も無く、一本のフレキシブルアームの内一本に取り付けられた、高速振動によつて物体を切断するバイブレー ションナイフが分厚い装甲を一瞬にして突き破つた。

残り一機となつた歩行戦車に対して戦闘を続行するデイウォーカー。それをぽかんと口を開けて見ていたオニールに、

「少尉！」

ボーンの声が掛けられ、そこでやつと我に帰る。

「曹長！？ 生きてたのか！ い、いや、それよりあれは 」

「それよりも早く退避しましょう。退路は奴が開いてくれました、早く！」

言いながら走り寄ってきたボーンが、オニールとケニーの姿を改めて見て顔をしかめる。だがすぐに顔を引き締めると、まず後部座席に持ち前の巨体と怪力でケニーのいつもより少しだけ軽くなつた体を放り込み、その後にオニールを立たせてケニーの隣に座らせる。自分もドアの無い助手席から運転席に乗り込み、掛けっぱなしのエンジンを確認すると車を発進させた。その間にもデイウォーカーは二機目の歩行戦車を撃破していた。

慣れた手付きでハンドルを切り、今来た方向 時計塔倒壊地点へと車を走らせる。

「何であれがここにあるんだ？」

腰のベルトを抜き、一の腕から先が無くなつた腕にきつく巻きつけて血止めをするオニールがデイウォーカーの登場を思い出して思わずボーンに聞く。

「補給部隊のジョナサンの奴がやつてくれたんですよ。何処から仕入れたか知りませんが、増援部隊から先行してあいつと補給物資を持つて駆けつけたんです。まあ、補給物資と言つても少しだけでしたがね。どうやら相当少尉の説教を受けるのが嫌だったようですよ」と、敵兵の死体が転がる通路を走らせながらボーンが笑う。それに釣られてオニールの顔にも笑みが浮かぶが、

「曹長、戦車が！」

時計塔の倒壊地点へ続く大通りから横に伸びる通路に、戦車の影を見つけたケニーが叫んだ。

あそこを抜けてきたか、と毒づきながら厳しい顔でハンドルを強く握る。すぐに戦車は大通りに現れ、砲塔を回し、装甲車に狙いをつけてくる。

「撃たれるぞ！」

「分かつてます！」

銃撃で壊されてしまったサイドミラーの代わりにバックミラーを見ながら車を走らせるボーン。その表情は誰から見ても必死そのものだ。戦車の砲口が装甲車に向いた瞬間、ステアリングを勢い良く右に切った。瞬間放たれた砲弾は装甲車に当たる事無く地面を抉る。「やつたじやないか！」

「まだまだですよ！」

何度も後方を確認しながら蛇行する。すぐに時計塔倒壊予定地点が見えてくるが、その時計塔から、大きな煙が上がった。次第に崩れてくる巨大な塔。時計を見ると、十分延ばした爆破予定時間丁度だった。

ゆつくりと傾ぐ時計塔。やがて、倒壊を始める。

「 ッ！」

息を呑むボーン。例えここで止まつとも、その時は戦車によつて殺されるだけだった。ならば

「突っ込みますよ少尉！」

「ああ、行け曹長！」

さらにアクセルを踏み込むボーン。悪路でさえ履帯を使い、最大速度で走れる戦車。しかし元々の最大速度がその重量の為に遅い上に馬力の弱いソーラーエンジンを使っているため、馬力で勝るガソリンエンジンで走る装甲車には敵わずどんどん距離が離れていく。更に敵は戦車の中からでは視界が狭い所為か、時計塔から立ち上る煙に気付いていない様子で砲口の狙いを定めつつ追つてきていた。倒れてくる塔の巨大な影が目の前に落ちる。そこでやつと戦車は塔の倒壊に気付いた様子で、全力でブレーキを掛けていたがその勢いの付いた重量を易々と止められる筈も無い。

「ぬおおおおおおお！」

ボーンの恐怖と希望を込めた咆哮。手を伸ばせば届きそうな位置まで落ちてきている塔に目もくれず、床を踏み抜く勢いでアクセル

を踏む。

一瞬、何の音も光も無くなつたかのような感覚に陥るオーナーとボーン。気付けば塔の落下よりも先に、その影から抜け出す事に成功し

「うおおおおあつはつハア！！！」

歓喜の声を上げるボーン。次いで、車体を止める事が出来なかつた戦車の真上に落ちていく時計塔。

助かつた、そう思つた瞬間 塔に押し潰されようとした戦車から、一矢報いるかのように砲弾が発射された。狙いも何もないその砲弾は装甲車のほんの少し後ろに着弾し

「なあ！？」

その衝撃で装甲車の後部が浮き上がる。フロントガラスに映る地面。

「駄目だあ！！！」

「ツ！」

悲鳴を上げるボーンと、息を呑むオーナー。

引つくり返るかと思つた瞬間、ケニーが自身の残つた腕がひしゃげてしまつほどの勢いで後部座席を殴りつける。完全に宙を浮いていた装甲車は、その衝撃で空中で車体を平定させ衝撃と共に地面に落ちた。

塔の倒壊によつて地震を思わせる衝撃と粉塵が車体を包む中、ボーンは若干車のスピードを緩めてオーナーと共に後方を振り返つた。しかし粉塵で何も見えない。

そのまま粉塵で前が見えなくなる前に車を進めると、開け放たれた助手席から入り込んだ砂利がオーナーの口に入つたのか、咳と共に吐き出す。すると、まるで腹の底に溜まつていたものが吹き出されるように、一人が大声で笑い始めた。

「ははははは！！ やるじゃないですかこのポンコツ車も！」

「全くだ！ ジョナサンの奴が持つてくる物はどれもこれも役に立ちすぎる……」

左腕でケニーを抱き寄せるオール。暫く傷の痛みも、戦闘中だと言つ事も忘れて笑い続ける一人。やがて笑いが収まつてくると、

「ああ、そう言えばジョナサンから伝言を預かつてましたよ」

「なんだつて？」

「書類のサインをお願いします、と言つておりました」

それを聞き、きょとんとした顔を見せた後、また笑いが込み上げる。ボーンも同じように笑い出し、今度は英雄の到着を待つっていた味方達の元に到着するまで笑いが続いたのだった。

それからさほど時を置かず、塔の倒壊によつて進路を断たれた敵部隊は転進を始める。しかし突然の倒壊と、それによつて巻き起つた視界を遮る大量の土埃に包まれた部隊は混乱の極みに突き落とされる。さらにそこへ各種センサーを搭載し、見えぬ物を見る事が出来るデイウォーカーが強襲。まともな反撃も出来ずに壊滅させられていつた。

そしてデイウォーカーを連れたジョナサン達に数時間遅れて到着した増援部隊と、その場で戦い続けていたオールの陸戦部隊の働きによつて敵軍は後退を余儀なくされ、オール達の属するA国は敵国制圧への王手を掛けたのだった。

街の象徴でもある時計塔を破壊する程の戦闘を繰り広げたフランディー争奪戦。後に負傷したオールの代わりに書いたボーンの報告書にはその細かな戦闘の詳細と、さらに報告書の最後にケニーを初めとするバトロイド達の活躍が誇張も含めて大々的に記されたのだった。

「……今頃、曹長は最終決戦に向けて準備中なのだろうな」

負傷によりキャドの街に連れて戻されたオーナーが、ベッドの横に座るケニーに視線を向けながらぽつりと話し始めた。傍に置いてあつた机には空となつた食器が置いてある。

「そうですね。……そこに参加出来なくて残念ですか？」

と、にこやかな笑みを浮かべたのだが、変形してしまつた顔の装甲の所為で人工皮膚を貼り付けてもまともな顔にはならないと、今はでこぼこの装甲を晒している為に表情の変化は掴めない。予備パーツを使い、吹き飛ばされた右腕を含めて大まかな修復をされたのだが、最終的にはドッグ入りをして完全なオーバーホールをしなければ戦闘に参加する事は出来ないだろう。

そんなケニーの姿を見、声を聞きながらオーナーも苦笑を浮かべて肩に掛けた上着の中から右腕を見せる。しかしその腕は二の腕から先が無く、痛ましく包帯が巻かれていた。

「こんな体ではもう戦えないよ。……義手を付けて戦っている者も居るらしいが、私がそんな風にして戦場に出れるようになる前に今回の戦争はもう終わつてるぞ」

そう言つて目を伏せながら上着の中に腕を戻す。だがその表情は落ち込んでいるよりも、嬉しそうにケニーには見えたらしい、

「なんだか嬉しそうですね。どうかしましたか？」

と、聞いてみると、オーナーはケニーにしか見せないような楽しそうな笑顔を浮かべて顔を上げた。

「こうして君と共に生きて話をしているのが楽しいんだ。あの時言つただろう？　君と会つてから、私は人生で一番楽しい時期を過ごしていただんだ。そしてこれからもそうやつて過ごしていく」と思つ「どこか照れた風に頬を染め、視線を下げるオーナー。

「……少尉……」

困惑したような声でケニーがオーナーを呼ぶ。だがその声に応じてオーナーが視線を上げると、

「ケニー。これからは私と二人で居る時はオーナーと、名前で呼ん

でくれないか？……それと、この戦争が終わつたら私と一緒に軍を辞めよう。……一人で一人で一緒に暮らそう」

嘆願するオニールの表情は真剣そのものであり、ケニーもふざけたりせずにその言葉に応えねばならないと感じ取つた。

「……私はロボットですよ？　こうして話をしているのもプログラムの機能から成る事です。……少尉はただ、混乱しているだけです。私は人間の姿を重ねているだけです。吊橋効果と言つ物を知つていますか？　少尉はそれを」

「分かつてゐる。君はロボットだ。君は鏡を見た事があるか？　その顔をどう見れば人間に見れるんだ。……君の言葉を借りるなら、私はロボットの君に恋をしたんだ。一十六年間一度もしなかつた恋を、君にしたんだよ」

ケニーの言葉を遮り、思いの丈を吐き出すオニール。それは嘘偽りの無い言葉だつた。彼女の気持ちを一身に受けるケニーはその言葉を自身の人工知能で反芻して考える。

「ロボットと人の間に愛情は成立するのでしょうか　オニール？」

その答えはやはりプログラムから成る言葉だつた。しかし、ケニー自身が今までの経験を踏まえて考へた言葉でもあつた。その言葉を聞いて、オニールは満足したように艶のある溜息を吐き出すと、

「君が望むならばな」

左腕だけでケニーの頭を引き寄せ、唇を重ね合わせた。

それから一週間、戦争はオニールの予想通りA国の勝利に終わつた。そしてオニールは更に一週間の入院の後に負傷を理由に軍を退役し

「やあ、曹長」

良く晴れた穏やかな風が吹く昼間、オニールは軍服ではなく、普

段人に見せたことのない、いや、そもそも自分から好んで着るような事の無かつた女らしい黒のスカートでボーンの居る兵舎にやつてきた。流石に露出の多い服を着るのに抵抗があつたのか、上はスリーブを思わせる、やはり黒色のタイトな上着を着ていた。

「おお、少尉。お久しぶりです。退院してからですか?……一週間ぶりですか」

義手を付けた右手を上げながらボーンの元にゅつたりと歩み寄る。戦時中はいつでも素顔ではあつたが、今は化粧をしていて元々美人だつたのが更に美しい顔をしている。

「少尉はやめる。もう私は軍人じやないんだ」

「今更カリーサン、とは恥ずかしくて言えませんな。それにそれを言うなら自分の事を曹長と呼ぶのもどうかと」

にやりと唇の端を吊り上げて笑うボーン。その姿に、負けたよ、と言つて苦笑を向ける。

ボーンがオニールの背後に回ると、腰に軽く手を回しながら傍のベンチまで案内し、一人で並んで座つた。

「右腕の調子はどうですかな」

「ああ、ちゃんと整備をしていれば元の腕よりも良く動いてくれる。この腕になつて少しだけケニーの気持ちが分かつた気がするよ」

「調整はケニーが?」

「いつもはな」

いつも? と、小首を傾げるボーン。

「今は入院中だ」

「ああ、確か開発中の介護用アンドロイドに体を移し変えると言つてしまひたな。あのボコボコの体のままで大変だろ?とは思つてましたが、やつと体が出来ましたか」

「うん。今、彼を作った会社の工場で人工知能の積み替えをしてるよ。……もう一時間ほどで作業は終わるらしい」

そう言つて腕時計を見て時間を確認するオニール。

「良かつたですが、彼のメモリを消される事も無くそのまま払い下

げが出来て。それもフランティー争奪戦の功績を買われて勲章付きの上での栄誉退職だつたそうではありませんか」

「ああ。元々退役する軍人の記憶を消す事は出来ない。ならば、同じ軍人であつたケニーの記憶だつて消す事は出来ないと黙つてくれられたりしたらしいがね。新しい体の方の資金も軍から出してくれたらしい。どうにもお偉いさんにジョーケイリータイプのバトロイドに思い入れのある人がいたようだ。元々ケニーのような初期型が開発された時は要人警護に使われる事が多かつたらしいからな、そういう人達が擁護してくれたんだろう」

「なるほど。やはり、機械でも人の心は動くのですな。それにしても……ドッグ入りではなく入院、ですか」

熊のような巨体を震わせてくつくつと笑うボーン。そんな彼を見ながらオニールは不満そうに笑う。

「いえ、すみません。……ですが、お一人とも上手い事やつているようですね。それにその格好」

ボーンの視線がオニールの顔からその下へ移る。露出は少ないがそれでも女らしい体つきが薄らと浮き出るその服装は、あまり派手な物を好みないオニールらしい格好だった。

「変わりましたね少尉。今のあなたを見ていると、自分の娘が初恋をした時の様子を思い出しますよ」

「そ、そうか?」

赤く染まつた頬を搔きながら視線を泳がせるオニール。そんな彼女にボーンはからかうようにわざとらしく笑う。

「そう言つ曹長だつて変わつたぞ。前はそんな風に人をからかつたりはしなかつた」

「自分は変わつておりませんよ。堅物少尉は冗談がお嫌いだつたようですから、あまりそう言う事を言わなかつただけです。苦労したんですよ? とびきりの冗談を思いついたのにそれを言わずに堪えるのは」

「……そ、そうなのかな？」

「ええ、と頷いて笑うボーン。途端に申し訳なくなつてつい顔を伏せてしまうオニール。

「無理をさせていたようだ。悪かつたな」「ですがそうして我慢をしていたお陰で今の少尉の姿が見れました。それでチャラになります」

「むう、と声を漏らしながらも、しかしオニールは気恥ずかしくてボーンの顔を見れないといた。

会話が止まり、ほんの少しの空白の時間が生まれる。

「 そう言えば」

「初めに口を開いたのはオニールだった。

「ケニーの製造元の会社でな、私に、次世代の介護ロボットのインターフェイスのアドバイザーになつてくれと頼まれたんだ。それに応じれば以降のケニーのメンテナンス費用も持つてくれる。でな、その担当が面白い事を言つっていたんだ」

「……なんと？」

「名前は伏せていたが、熊のよつたな大男が私の話をまるで自分の事のように嬉しそうに話してくれたらしくて、それを聞いて私にアドバイザーの話を持ちかけたんだとか。誰なんだろうな、その大男は昔に見せた影のある笑みを浮かべながら隣に座る熊のよつたな大男を見上げるオニール。ボーンもその問い合わせに對し、誰なんでしょうね、と言ひながら苦笑を浮かべていた。

「そのアドバイザーには私だけじゃなく、私のようにバトロイドと友人のよつたな関係になつた者達も呼ばれていたよ。名前を聞いて驚いた。どれもこれも多くの武勲を立てた堅物軍人だった」

「自分の事を鑑みながら笑うオニール。

「嬉しいではないですか。まあ、友人以上の存在になつたのは少尉だけだと思いますがね」

そしてそんなオニールをからかうボーン。

だがそう言う事を言われても、それが事実であり、オニールは腹

を立てる事は無くむしろ清々しい気持ちになる。

「でも今後のバトロイド開発ではインターフェイス機能は完全に排除するそうですよ。少尉のように、彼らの命を守ろうとして負傷したり死亡したりする者が多かったらしいです」

ふと真面目な表情をして、ぽつりと呟くボーン。その表情は何処か浮かないが、しかし仕方無さそうな表情でもあった。

「そうだな。だがケニーのようなインターフェイスの発達した者のデータがあるお陰で今後のアンドロイド開発に進展があるんだろう。……逆に、今度はそういった科学の進展を次の戦争が起きたら人殺しの為に使われるんだろうな。元軍人の私が言うのもおかしいが、世界からはどうにも戦争がなくなるものだ」

「そうですね。動物にも本能的な繩張り争いがあるように、戦う事は生物の本能なのでしょう。だから、人が絶滅でもしない限り戦争はなくならないでしような」

そのお陰で自分は食事にありつけるのですが、ヒジヨークを飛ばすが、オニールは笑わない。

「……最近、少し悩む事があるんだ。私の家の近所では私が軍人なのは知られているし、私の家にケニーが、バトロイドが居るのも知られている。そして私が彼に恋をしているのも。……白い目で見られてるよ。それで時々思つんだ、他人にはケニーがロボットに見える。だが、私はケニーをどう言う風に見ているんだろうかと」

オニールの言葉にふむ、と鼻息を漏らして腕を組んで考え込むボーン。

「今の時点では少尉はどう思つているのですか？　彼を人間だと？」

「それともロボットと？」

「……分からない。だが、私はケニーをケニーとして愛しているんだと思う。でもはつきりとした答えはまだ出そうにない」

「なるほど。……自分から一言言わせて貰えれば　ケニーは人ではありません。ですがロボットでもありません。彼は人と同じように考え、行動します。たとえそれがプログラムから成る行動であつて

も、それはケニー自身が下した答えです。人の心と言つものが頭にあるのか心臓にあるのかは分かりませんが、ケニーの場合はそれが人工知能と言う回路の中にある。それだけの違いです。

彼は……いえ、彼らは基本的に人に好かれる為に相対する人間に好かれる言動をします。ですがそれは人も同じです。先ほど言つたように自分は少尉の前では生真面目な軍人を演じていました。そうすれば少尉の機嫌を損ねる事が無いと思つたからです。ケニーがしている事もそれと全く変わらないと言えるでしょう。

だから自分は思うんです。彼のような人工知能を持った者は人の心とロボットの体を持った人間とはまた別の生命なのでは無いかと。だから、あなたは彼を愛していると言う事を胸を張つて言つても良いのですよ。それが愛情の形と言つものです。そもそも愛情を向けていいものが生きている物だけとは限りませんしね

そんな大学教授のような講釈をするボーン。口を開いて呆気に取られながら彼の話を聞き、やつと頭の中で整理が付いたオーナーが、「中々哲学的じゃないか。……だが、確かにそうなのかも知れないな。ありがとう、曹長にそう言わると少し気が楽になつた気がするよ」

そう言つてベンチから立ち上がるオーナー。

「もう行きますか？」

「うん。もう少し居ても間に合つけど遅刻して目覚めたケニーを待たせるような事はしたくない」

「はは、相変わらずケニー中心ですな。あまり依存しているとそのうち一時も離れられなくなりますよ」

ボーンのジヨークに、望むところだ、と返すオーナー。そこで二人が軽く笑つた。

「少尉、何かあつたらいつでも連絡ください。力になりますよ」

「ああ、ありがとう。……また来るよ。今度は新しい体のケニーと一緒に」

「その時は是非結婚式の招待状も頂きたいのですな」

「ははは、分かつた分かつた。曹長は一番に招待するぞ」

それじゃあな、と挨拶をして歩き出すオーナー。無い胸を張つて歩くオーナーの背中に、

「少尉」

「ん？」

「良い青春を」

ボーンは、思いついたジョークと共に敬礼を送ったのだった。

(後書き)

初めて書いた短編です。面白いと言つて頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4549f/>

愛情の形

2010年10月8日15時19分発行